小矢部市埋蔵文化財調査報告書第15冊

富山県小矢部市

桜　町　遺　跡

ー城山都市下水路新設工事に伴う産田地区の調査ー

1984

小矢部市教育委員会

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第15冊

富山県小矢部市

桜　町　遺　跡

ー城山都市下水路新設工事に伴う産田地区の調査ー

1984

小矢部市教育委員会

序

私達がふだんなにげなく行なっている習慣や、使っている道具などの中には、驚くほど長い歴史をもつものがあります。このような先人達の知恵と努力の積み重ねによって、私達は現在の豊かで便利な暮しを営むことができます。この先人達の残した足跡が、歴史として大地に刻み込まれたものが埋蔵文化財と呼ばれるものです。小矢部市は、県内屈指の遺跡の密集地として知られており、とくに小矢部川左岸丘陵沿いにこのような埋蔵文化財が数多く存在し、私達に当時の人々の生活を生き生きと語りかけてくれます。これは私達の誇りであり、その大切さを自覚し、守り、後世に伝えてゆくことが私達に課された重大な任務であることはいうまでもありません。

しかし、昨今の大規模開発に伴ない、全国的に多くの遺跡が失われつつあります。遺跡の破壊は、いい換えれば私達の歴史の破壊にほかなりません。過去の歴史をふまえながら新たな一歩を踏み出してこそ真の発展につながるものと考えます。「覆水盆に返らず」と申しますが、一度掘りかえされた遺跡は、決してもとにもどすことはできません。私達は、そのことをよく自覚した上で、今後の開発と私達が進むべき方向を考えてゆかなければなりません。本書にまとめられた成果が、少しでもお役に立つことができれば幸いに存じます。

最後に、調査を行なうにあたりまして、多くのご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ関係諸機関に対して、深く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご助力を賜わりますようお願い申し上げます。

1984年3月31日

小矢部市教育委員会

教育長　山　崎　厚　志

例　　言

1．本書は1983（昭和58）年度小矢部（おやべ）市城山都市下水路新設工事に先立って、小矢部市教育委員会が実施した桜町（さくらまち）遺跡（小矢部市桜町字産田（さんでん）所在）発掘調査の成果をまとめたものである。

2．調査は小矢部市教育委員会社会教育課主事伊藤隆三、同嘱託高木場万里が担当した。

3．出土遺物の整理、実測、整図、写真撮影及び本書の編集は伊藤・高木場がおこなった。

4．本文執筆の分担は次のとおりである。第Ⅰ章伊藤、第Ⅱ章－１伊藤、２・３高木場、第Ⅲ章高木場、第Ⅳ章－１・４伊藤、２・３・５高木場、第Ⅴ章－１伊藤、２・３高木場

5．註および参考文献は本文の後に一括し、本文中ではその番号のみを記した。

6．出土遺物について、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事酒井重洋氏、宮田進一氏より有益かつ適切なご助言、ご教示をいただいた。記して謝意を表したい。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と歴史的環境……1
第Ⅱ章　調査の概要……5
　1　調査に至る経過……5
　2　昭和57年度の調査……6
　3　昭和58年度の調査……6
第Ⅲ章　層位と遺構……9
　1　層　位……9
　2　遺　構……10
第Ⅳ章　遺　物……15
　1　須恵器・土師器……15
　2　珠洲焼・土師質土器・土錘……17
　3　銅　銭……19
　4　木製品……19
　5　石製品……19
第Ⅴ章　まとめ……23
　1　出土須恵器と生産地……23
　2　中世以降の遺物……23
　3　遺物の分布と遺構の所属時期……25
註・参考文献……26

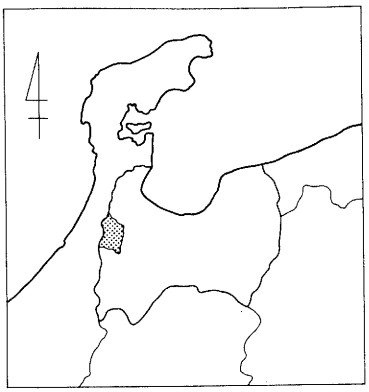
挿　図　目　次

第１図　小矢部市の位置……1
第２図　市内の遺跡分布……3
第３図　城山都市下水路の位置……5
第４図　調査位置と周辺の地形……7
第５図　昭和57年度調査区出土土器……8
第６図　層　位……9
第７図　遺　構……11
第８図　１区～８区の遺構……13
第９図　井戸及び付属施設……14
第10図　須恵器・土師器・土師質土器・土錘……16
第11図　珠洲焼……18
第12図　銅　銭……19
第13図　木製品・石製品……20
第14図　石製品……21
第15図　14～49区の遺物分布……24

図　版　目　次

図版１　空中写真
図版２　調査区(1)　調査前
図版３　調査区(2)　試掘調査完了後
図版４　遺　構(1)　１～８区の遺構・14～48区の遺構
図版５　遺　構(2)　井戸（ＳＥ１）及び石製片口鉢出土状態・井戸付属施設（ＳＫ２）
図版６　遺　物(1)　須恵器・土師器・土師質土器・土錘
図版７　遺　物(2)　珠洲焼
図版８　遺　物(3)　木製品
図版９　遺　物(4)　石製片口鉢・石臼

第Ⅰ章　遺跡の位置と歴史的環境



第１図　小矢部市の位置

散居村として著名な砺波平野は、富山県西南部をしめる。小矢部市はその北西隅に位置し、旧西砺波郡石動(いするぎ)町及び同砺中(とちゅう)町が昭和37年に合併してできた、県内九市中最も新しい市である。市名ともなった小矢部川は市内中央を南北に貫流し、市域を東西に２分している。この左岸西・南部にはそれぞれ、砺波丘陵、蟹谷(かんだに)丘陵と称される標高200～300ｍの低丘陵がひかえている。この一帯は県内でも遺跡集中度の高い地域として以前より知られるところであるが、昭和54年度より実施している遺跡詳細分布調査によりさらに遺跡数は増加し、現在160余ケ所を数えるに至っている。[1]ことに古代・中世のそれについては、旧来の認識を一新させるものがある。桜町遺跡は他の松永遺跡、福田遺跡、棚田遺跡などともに、この調査によって発見された該期の大遺跡である。

古代利波(となみ)郡の研究は、今まで、主として庄川右岸とその周辺の地域に視点がしぼられており、当市域はやや等閑視されるきらいがあった。しかし、これら発見された遺跡がこの問題についても、今後貴重な資料を提供してくれることは疑いない。ことに利波郡(評)衙、越中最初の坂本駅[2]、越の三関のひとつ砺波関などが、この遺跡群とどのような係りをもつのか注目されるところである。

これら遺跡群は中世に至っても、そのまま奈良・平安時代の遺跡と重なり合うことが多く、以後継続して営まれていたことをしめしている。小矢部川左岸のこの一帯に所在することが知られている古代・中世の荘園に、蟹谷庄、松永荘、埴生(はにゅう)保、宮嶋保があるが、[3]その中核的遺跡として、蟹谷庄は向島遺跡、末友遺跡及び平田・藤ノ森遺跡が、松永荘は松永遺跡、松尾遺跡などが、埴生保には北反畝(きたたんせ)遺跡、埴生南遺跡などが、さらに宮嶋保には桜町遺跡などがそれぞれ推定されるのである。

さてここで桜町遺跡とその周辺の遺跡についてふれておきたい。遺跡は市内北方、小矢部川と子撫川の合流点付近の子撫川右岸、低段丘上に位置する。城山北西麓谷部より平野部に向い広がっており、その範囲は東西約１km、南北約0.8kmに及ぶ。その営まれた時間幅もまた長く、縄文時代前期～晩期、弥生・古墳時代～奈良・平安時代、中近世に及んでい

る。周辺には縄文時代前期とされる宮中遺跡ほか、屋波遺跡、屋波牧南遺跡などが、背後の丘陵には天狗山古墳群、桜町横穴墓群[(4)]がある。子撫川を隔てた対岸の田川地内は圃場整備以前、条里型地割りを比較的良好に残した地域としても知られている。

なお、当遺跡は国道８号小矢部バイパス建設に伴い昭和55年より発掘調査が実施されているが、昭和58年度までの調査で、奈良時代及び中世の集落跡[(5)]、近世の生活実態を示す大量の木製品[(6)]などが発掘されている。

---

1. 桜町遺跡
2. 桜町横穴墓群
3. 天狗山古墳群
4. 宮中遺跡
5. 屋波牧遺跡
6. 屋波牧南遺跡
7. 屋波牧古墳群
8. 今石動城跡
9. 後谷古墳群
10. 道坪野遺跡
11. 峰坪野遺跡
12. 下川原遺跡
13. 野端古墳群
14. 高野山古墳群
15. 綾子遺跡
16. 野端将軍塚古墳
17. 大勢町遺跡
18. 北反畝遺跡
19. 八俵西遺跡
20. 谷内窯跡群
21. 谷内Ⅰ遺跡
22. 谷内古墳群
23. 柿ノ木平古墳群
24. 谷内Ⅱ遺跡
25. 柿ノ木平遺跡
26. 埴生五俵刈遺跡
27. 埴生上野遺跡
28. 若宮古墳
29. 埴生南遺跡
30. 石坂アブラキ遺跡
31. 関野古墳群
32. 葵塚・巴塚古墳群
33. 関野遺跡
34. 西蓮沼窯跡
35. 蓮沼新提窯跡
36. 山王奥窯跡
37. 長窯跡群
38. 松永窯跡群
39. 鉢巻山山麓遺跡
40. 山王遺跡
41. 松永遺跡
42. 日の宮・道林寺遺跡
43. 竹倉島遺跡
44. 福田遺跡
45. 新行寺東遺跡
46. 新行寺西遺跡
47. 新行寺南遺跡
48. 松尾遺跡
49. 松尾談議所遺跡
50. 北一北遺跡
51. 北一墳墓群
52. 北一Ⅴ遺跡
53. 小谷山遺跡
54. 北一Ⅵ遺跡
55. 五郎丸東遺跡
56. 八講田遺跡
57. 棚田遺跡
58. 末友遺跡
59. 向島遺跡
60. 勝興寺安養坊遺跡
61. 臼谷竹屋橋Ⅱ遺跡
62. 臼谷竹屋橋Ⅰ遺跡
63. 臼谷八幡宮遺跡
64. 臼谷岡ノ城北遺跡
65. 臼谷岡村遺跡
66. 臼谷栃分Ⅰ遺跡
67. 臼谷栃分Ⅱ遺跡
68. 臼谷岡ノ城遺跡
69. 臼谷西Ⅰ遺跡
70. 臼谷西Ⅱ遺跡
71. 臼谷念仏湯遺跡
72. 臼谷山田遺跡
73. 小白山山麓遺跡
74. 末友南遺跡
75. 平桜岡山窯跡群
76. 平桜川東遺跡
77. 小森谷遺跡
78. 平田・藤ノ森遺跡
79. 杉谷内Ⅱ遺跡
80. 藤ノ森晩手山遺跡
81. カネタタキ山遺跡
82. 杉谷内Ⅲ遺跡
83. 杉谷内床ノ山遺跡
84. 杉谷内Ⅰ遺跡
85. 名畑城跡
86. 杉谷内Ⅳ遺跡
87. 興法寺戸久遺跡
88. 戸久遺跡
89. 頭無Ⅰ・Ⅱ遺跡
90. 安養寺遺跡
91. 浅地遺跡
92. 西法寺山遺跡
93. 御坊様山遺跡
94. 浅地古村遺跡
95. 競馬山遺跡
96. ズンデ山古墳
97. ズンデ山遺跡
98. 浅地神明社前遺跡
99. 浄土寺山遺跡
100. 高木山遺跡
101. 高木遺跡
102. 蓑輪遺跡
103. 蓑輪西遺跡
104. 蓑輪大将軍遺跡
105. 蓑輪大将軍古墳群
106. 興法寺遺跡
107. 興法寺頭振遺跡
108. 興法寺丸山遺跡
109. 興法寺丸山古墳群

遺　跡　地　名　表

第2図　市内の遺跡分布

第II章　調　査　の　概　要

1.　調査に至る経過

城山都市下水路埋設工事は市内西町を起点に、昭和59年完成を目指し、昭和52年に着工した。終点は一級河川子撫川で総延長2,502mに及ぶ（第３図）。

旧石動地区は、近年市街化が急速に進行し、背後の丘陵地は切り開かれ宅地化されつつある。これにより従来道路側溝や小水路によっておこなわれていた排水、ことに自然環境の急激な変化によって生じる大量の雨水の処理が追いつかず、豪雨時にはたびたび浸水が発生していた。当該事業は、主としてこの問題を解決するため計画されたものである。

工事区域が、市街地及び既設の道路下となる場合が多いため、全延長の約60%は地中で管を押し進める推進工法により行なわれている。管が地下120cm以下に埋設されるため、遺跡所在地にあってもこの工法によれば、直接遺跡に影響が及ぶ面積はごく少ない。しかしながら市街地をはずれた水田地帯でこれは開削工法に切りかえられ、管の埋設位置すべてが開かれることになる。昭和57年・58年度の工事は桜町遺跡の所在する桜町字産田地内でこの開削工法により実施されることになり、これにより延長約350mにわたり遺跡に直接影響が及ぶこととなったのである。

昭和56年、事業主体である市都市計画課（昭和59年度より下水道課）と市教育委員会社会教育課との間で事前協議がもたれ、市都市計画課の費用負担で２カ年にわたり発掘調査を実施することが決まったのである。

昭和57年には主要地方道小矢部伏木港線及び国道８号小矢部バイパス予定地の一部を含め、1,700㎡余りを、昭和58年度には、都市下水路部分のみ440㎡を対象として発掘調査を実施した。

第３図　城山都市下水路の位置（1／5000）

2. 昭和57年度の調査

桜町遺跡（産田地区）における既応の調査としては、57年度に主要地方道小矢部伏木港線から国道８号小矢部バイパス建設予定路線にいたるまでの約200ｍを対象として、試掘調査および本調査を行なっている。

試掘調査は、同年７月23日から８月21日にかけて実施した。調査は南北をＹ軸、東西をＸ軸とする座標にあわせて、南北２ｍ、東西５ｍの試掘トレンチを10ｍごとに25カ所設定して行なった。試掘調査の結果に基づき、同年10月１日から12月22日まで延57日間にわたり、調査対象区の北半部、約1,736㎡の全面発掘調査を実施した。調査の結果、掘立柱建物２棟、柱穴群、溝、土坑などの遺構を検出し、遺物では、黄白色粘質土の良好な遺物包含層を確認することができ、弥生時代から近世にいたるまでの土器類や、石器類、銅銭、煙管などが出土した。

57年度調査により出土した土器のうち主なものを第５図にあげた。この調査では、遺物のほとんどが包含層から出土したものであり、遺構に伴うものはごくわずかである。また小破片が多く、土師器などは磨耗が激しく、器面の調整などは不明なものが多い。

１～７　弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのもので、その出土地点が調査区南に限られるような傾向がみられる。遺構に伴うものはなく、すべて包含層からの出土である。

８～10　壺・小型丸底壺・高杯があり、図示できなかったが、高杯脚部は中膨みの筒部が急に屈折するもの、ラッパ状のものがある。古墳時代の土師器としては、市内道林寺Ｉ遺跡[7]、竹倉島遺跡[8]などが知られるが今回出土のものはそれらに先行するものである。

11～19、11・12は内面にかえりをもつ。13・14は端部が短かく下方にふくらむ。15は天井部は丸く口縁部との境いに段をもち、端部は下方へおれる。16は低くつぶれた高台をもつ。17・18は底部が平坦で口縁部が17は直線的にのび、18は外反する。19は長頸瓶、高台に穴をもつ。７世紀後半から８世紀と考えられる。

20・21　20は長胴甕。21は堝。同一個体ではないが把っ手も出土している。

22・23　珠洲焼。22は底面に静止糸切り痕を残す。

24・25　土師質の小皿で口縁部が比較的急角度で立ち上がり外反する。

3. 昭和58年度の調査

58年度調査は、国道８号小矢部バイパス建設予定路線から、子撫川旧右岸段丘北端までの約440㎡を対象とした。

桜町遺跡の調査にあたっては、磁北を基準として南北をＹ軸、東西をＸ軸として遺跡全

体を覆うことのできる座標を設定している。今回の調査区はX66～68、Y85～91の地点にあたるが、調査区が幅約４ｍ、長さ約110ｍ、と長いために、調査にあたっては下水路センターラインを利用して独自のグリットを設定した。

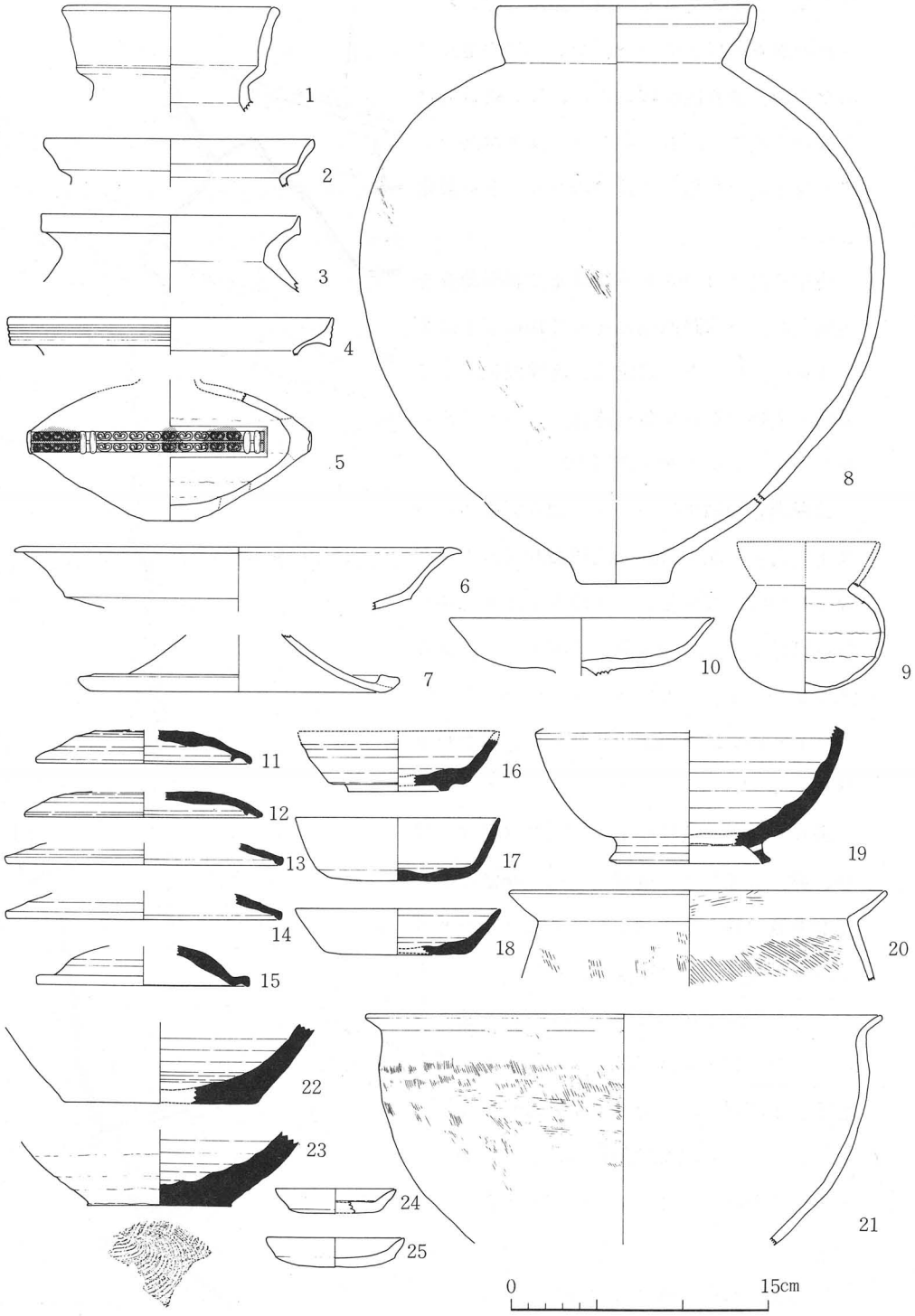
同年８月２日から８月13日まで試掘調査を実施した。下水路西脇にそって10ｍごとに２×４ｍのトレンチを設定し、北端段丘上では遺構・遺物の存在する可能性が高いと考えられたので[(9)]、トレンチの間隔を密にした。

試掘調査の結果に基づき、調査区をバイパス予定路線以北、段丘北端標高26.5ｍの等高線より内側に設定し、引き続き同年８月18日から11月７日まで発掘調査を実施した。調査区を北から２ｍごとに区切り１～48区とした。うち９～13区は試掘調査の結果から調査対象区外とした。

調査の結果、遺構は１～８区では柱穴、井戸、溝、土坑などを確認し、14～48区においても多数の柱穴を確認した。遺物は１～８区では土器類の出土が少なく、井戸の中から木製品、石製品が出土し、土坑からも石製品が出土した。14～48区では、全域にわたって須恵器、土師器、珠洲焼などの土器類が多数出土し、その分布状況は第15図に示した通りである。また柱穴に伴って土師質の小皿が１点出土した。

57年度において確認した遺物包含層は、今回の調査では確認できなかった。

第４図　調査位置と周辺の地形（1／2500）

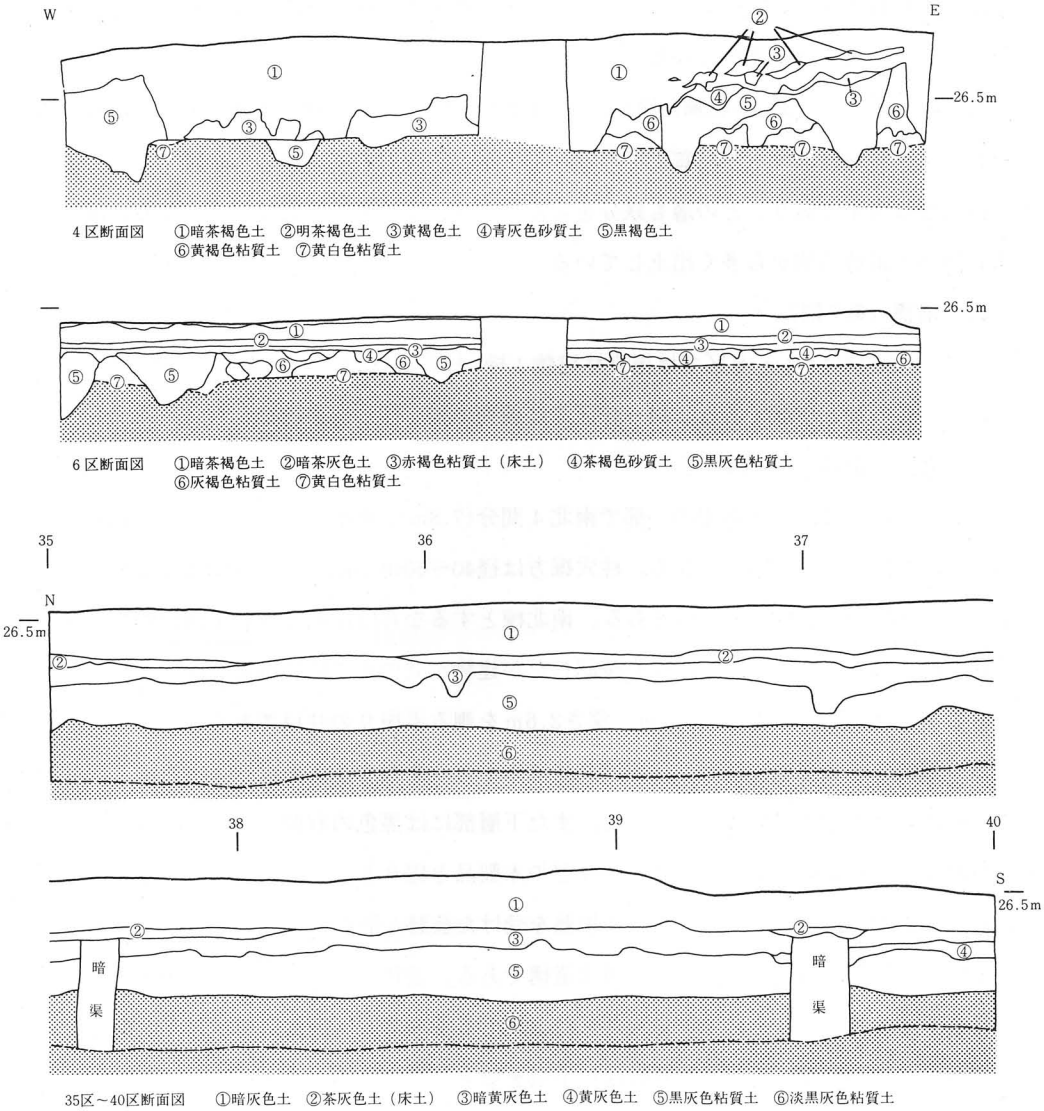


第５図　昭和57年度調査区出土土器(一部)　1／4

第Ⅲ章　層　位　と　遺　構

1．層位

今回の調査区は、調査以前には１～８区は畑、14～48区は水田であった。しかし、１～８区のうち５区以南はかつて水田であったものと思われ、標高26.5mを境として第Ⅱ層以下の層位が多少異なる（第６図）。



第６図　層　　位

1～4区の層位(4区断面図)は、第Ⅰ層暗茶褐色土、第Ⅱ層黒褐色土、第Ⅲ層黄褐色粘質土、第Ⅳ層黄白色砂質土（やや粘質をおびる）である。第Ⅰ～Ⅲ層の堆積は水平ではなく、かなり複雑に入り組んだ状態を示しており、第Ⅰ層には明茶褐色土、黄褐色土、青灰色砂質土層などがブロック状に含まれる。

5～8区の層位（6区断面図）は、第Ⅰ層1～4区と同様、第Ⅱ層暗茶灰色土、第Ⅲ層茶褐色砂質土、第Ⅳ層灰褐色粘質土、第Ⅴ層1～4区の第Ⅳ層と同様である。第Ⅰ層と第Ⅱ層は耕作土であり、第Ⅰ層と第Ⅲ層あるいは第Ⅱ層と第Ⅲ層の間には、鉄分を多量に含む赤褐色の粘質土（床土）が薄く広がる。第Ⅰ・Ⅱ層および床土は水平な堆積状態を示すが、第Ⅲ・Ⅳ層と第Ⅴ層の上面は複雑に入り組んでいる。

14～48区の層位（35～40区断面図）は、第Ⅰ層暗灰色土、第Ⅱ層暗黄灰色土、第Ⅲ層黒灰色粘質土、第Ⅳ層淡黒灰色粘質土である。第Ⅰ層と第Ⅱ層の間には床土が薄く堆積する。堆積状態は水平であり、どの層も鉄分を含んでおり、その量は下層ほど多くなる。遺物は第Ⅱ層と第Ⅲ層の間から多く出土している。

2. 遺構（第7図）

確認した遺構は、1～8区では掘立柱建物1棟、柱穴群、井戸1基、溝2本、土坑2基、のほか多数のピット群である。14～48区では柵列1列、柱穴群を確認した。

1～8区の遺構（第8図）

ＳＢ１　建物の東辺と南辺の一部で南北4間分(7.8m)、東西1間分(2.1m) を確認しており、調査区のさらに西へ延びる。柱穴掘方は径40～60cmの円形で、柱間は北より1.8・2.1・1.8・2.1m、東西は2.1mである。南北棟とするならば磁北より若干西に傾むく。

柱穴群　ＳＢ１のほかにも数個を確認したが建物が立つまでには至らなかった。

ＳＥ１（第9図）　上面径1.7m、深さ2.6mを測る素掘りの井戸である。断面は上部がゆるい傾斜をもって上に開き、底部は袋状にふくらみをもつ。底面径は60cmを測る。井戸内上層からは少量の土器片が出土した。また下層部には黒色の有機質土層が推積し、石臼・片口鉢などの石製品や曲物・著・漆器などの木製品と握りこぶし大の石が多く出土した。これらの出土遺物は、すべて二次的な加熱を受けた痕跡が認められる。

ＳＤ１　幅50cm前後の東西方向の溝状遺構である。遺物の出土はみられなかった。

ＳＤ２（第9図）　ＳＥ１とＳＫ２を結ぶ溝である。溝幅は西側肩部がピット群によって切られているが推定約60cm、断面はＵ字型をなすと思われる。深さはＳＥ１側で35cm、ＳＫ２側で55cmを測り、ＳＥ１からＳＫ２へ向って流れていたものと考えられる。埋土内か

第7図　遺　　構　（1/200）

らは土師質土器の砕片が少量出土している。

ＳＫＩ　長径2.2m前後、短径1.2m前後、深さ約20cmの楕円形の土坑である。出土遺物はなく、その性格は不明である。

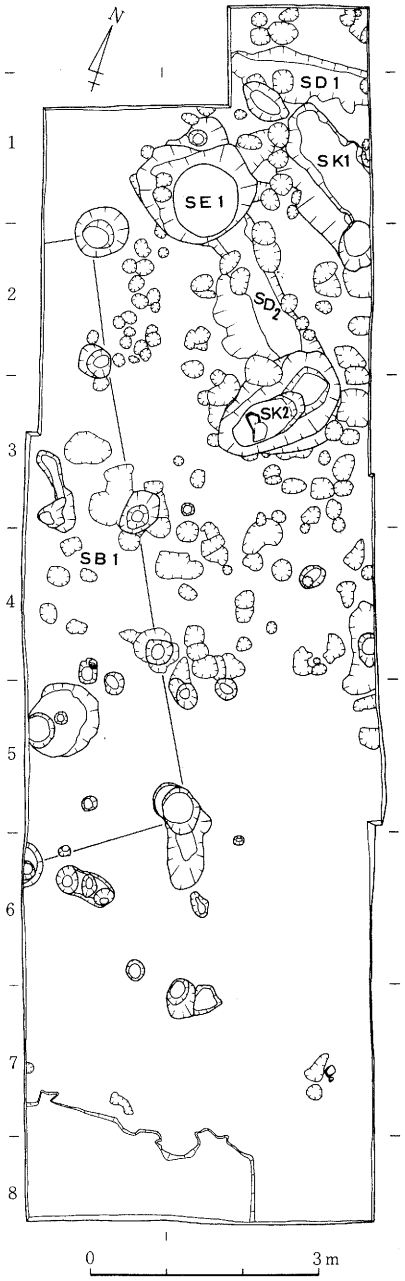
ＳＫ２（第９図）　上面の長径1.8m、短径1.1m。東西に長い小判型の土坑である。上面より70cm下がったところで、東側に平坦面を持つ。したがって東西の断面は階段状をなし、壁はほぼ垂直に立つ。底面での長径は80cm、短径は50cm、深さは東側の平坦面で65cm、底面で1.5mを測る。底面中央で扁平な石を１点検出した。土坑内からの出土遺物は、石製品と上層から珠洲焼の小破片が各々１点である。この土坑は、ＳＤ２とともにＳＥ１に付属する施設と考えられ、ＳＤ２がＳＥ１からＳＫ２へ向って流れていたと考えられることから、水溜施設のような機能を想定できるが、正確な用途は不明である。

ピット群　１～４区に集中している。径10～40cmを測り、大小さまざまな不定形なピット群である。第Ｉ層途中より平面プランが確認できるものもあり、性格は不明である。集中区域が標高26.5mを境としており、前述した層位の境と一致する。

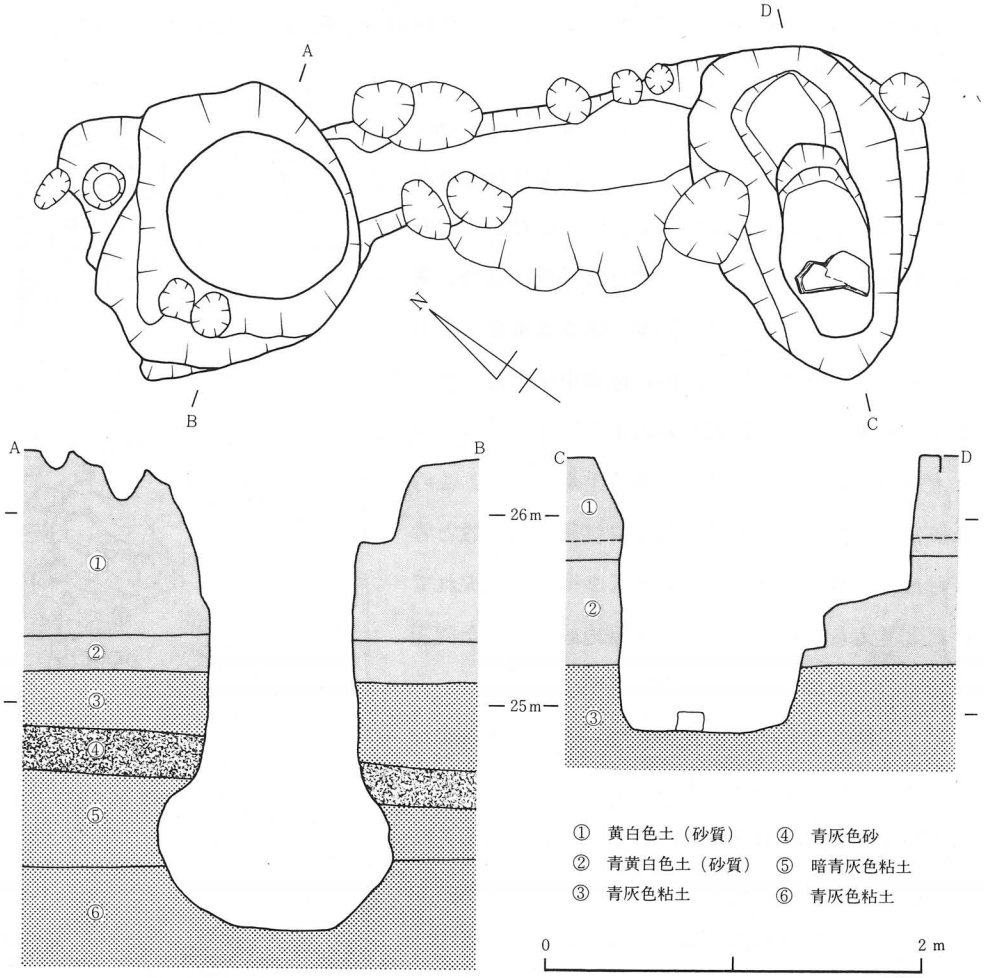
14～48区の遺構

ＳＡＩ　径70cm前後の柱穴が南北に３穴ならぶ。全長5.5m、柱間1.7mを測る。確認できたものは３穴であるが、柱穴の距離から考えるならば、北から２穴目と３穴目の間にもう１穴存在すると考えられるが、後世の暗渠排水施設があり、その存在を確認することはできなかった。

柱穴群　14～48区で検出した柱穴群は、その大きさと埋土によって２群に分けられる、第１群は径50～70cmを測り、埋土は白っぽい粘質土である。埋土



第８図　１区～８区の遺構



第９図　井戸（ＳＥ１）及び付属施設（ＳＤ２－ＳＫ２）（1/40）

内には土師質の土器片が混入している。ＳＡ１の柱穴は第１群と同様のものである。第２群は18～25区に集中している。径20㎝前後と大きさが揃っており、ととのった円形の平面プランをもち、垂直に掘り込まれている。埋土は上層が小礫を多く含む荒い砂層で、周囲は多量の鉄分を帯びる。底部に根固めのためと思われる石をもつものが１穴、土師質の小皿が出土したものが１穴ある。検出した柱穴は限られた範囲でかなりの数にのぼるが、建物が立つまでには至らなかった。第１群と第２群の柱穴の間には、切り合い関係もなく、積極的に時期差を考えられるような根拠はみられないが、あるいは若干の時期差を考えてみるべきかもしれない。

第Ⅳ章　遺　　物

調査区のほぼ全域から遺物の出土をみているが、ことに14区～48区の包含層からの出土が多い。白鳳、奈良、平安時代にいたる須恵器・土師器および珠洲焼が主たるものであるが、少量ながら古墳時代の須恵器・土師器が含まれ、中世以降のものとみられる土師質小皿および土錘などもある。

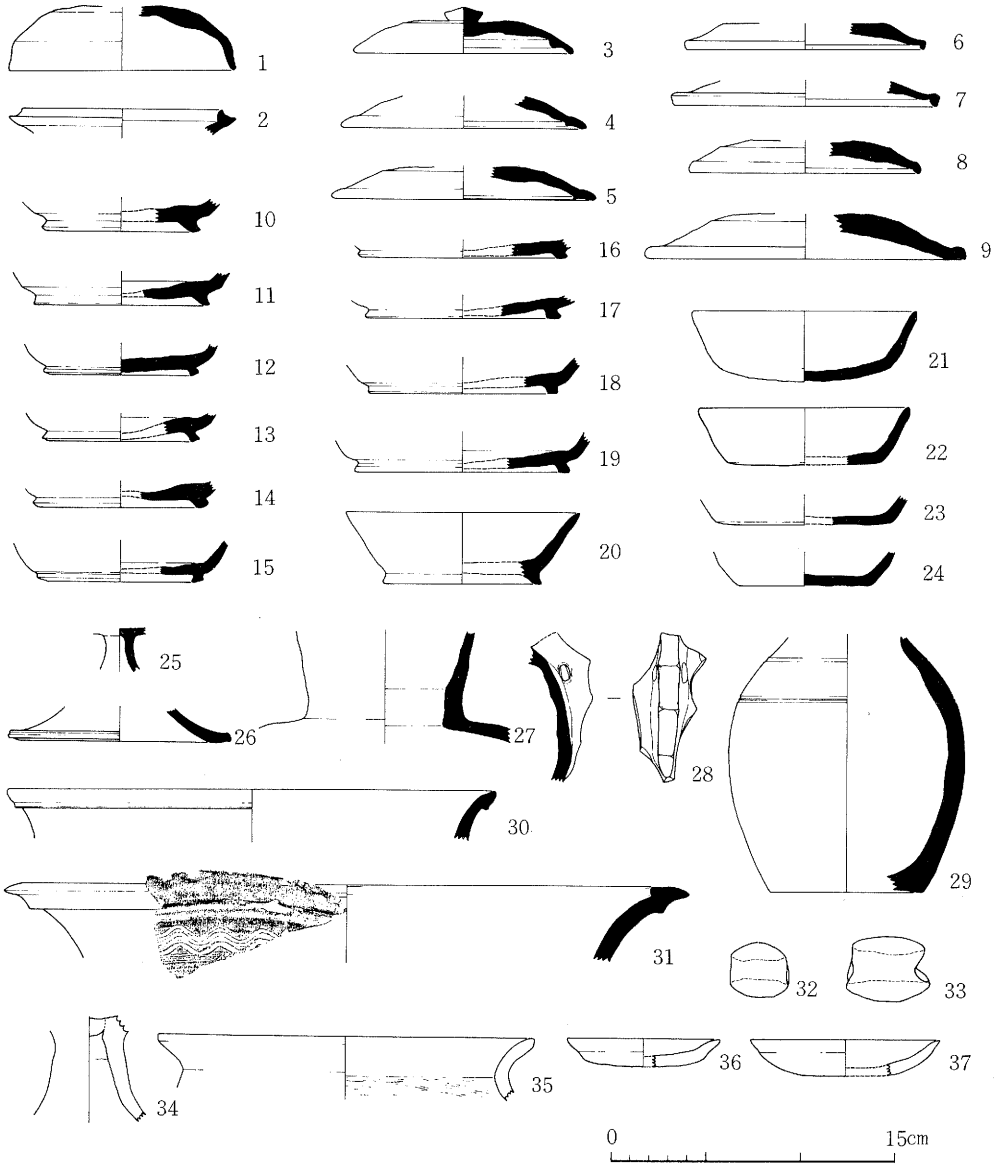
１～８区で検出された井戸・土坑、柱穴など、遺構に伴う遺物には、石製片口鉢、石臼などの石製品、箸、曲物、漆器などの木製品、銅銭がある。

Ⅰ．須恵器・土師器（第10図）

須恵器には杯蓋、杯、壺、横瓶、双耳瓶、高杯、甕などがある。第10図１は蓋・身が逆転する以前の蓋で６～８区及び45区出土品が接合した。直線距離で約75ｍ離れたものである。内面及び外面体部中位までナデが及ぶが天井部はヘラ削り痕をそのままのこす。体部と天井部との境をなす稜は不明瞭である。口径12cm、器高3.5cm。２は細片であるが、立ちあがりをもつ杯身口縁部である。41区より出土している。３～５は内面に身受けのかえりを有する杯蓋で、これ以外にも数点ある。３は口径11.4cm、器高2.5cmを測り、比較的しっかりしたかえりをもつ。算盤珠形のつまみを付している。これ以外のもののかえりは小さく消失直前を思わせる。内外面ともにナデにより仕上げ、３・５は天井部に削り痕が観察される。口径は13～14cm程度を測る。これらとほぼ同期に比定できる遺物として杯10・11があげられる。いずれも29～37区の間で出土した。６～９の杯蓋は８世紀中葉およびそれ以降のものと考えられる。６・７は口縁部がやや屈曲し、端部にやや内傾する面を有するものである。６は天井部に平坦面を削り出しており、体部との間に弱い稜をなす。口径12.4cm～13.8cm。これらよりやや後出のものと思われる８は全体にやや厚手のもので、口縁部は丸みをおびやや外方へ折れる。天井部はヘラ削りのあとナデにより仕上げられる。９もやはり厚手で、口径16.6cmの大型品である。口縁部はやや強く屈曲する。８・９は胎土に比較的大粒の砂粒を含む。この他12～24に示す遺物もほぼこれと同期に含まれるものが多いと思われるが、20の有台杯は、高台から腰を張らずに斜め上方にのびる体部をもつもので時期的にやや下降すると思われる。口径12.3cm、器高3.8cmを測る。27・28は双耳瓶の頸部及び耳である。耳は稜角的に仕上げら、長円形の孔が穿たれている。29は体部が卵形をなす瓶で、体部上半に１～２条を単位とする沈線が２段にひかれる。器壁は底部から上方

に向い除々に厚さを減じ、頸部で最も薄く３㎜程度となる。底部の切り離しはするどく、痕跡は確認できないが糸によったものと思われる。９世紀代に下降する時期が与えられる。

土師器には高杯脚柱部、甕などがある。35は長胴甕口縁部片である。口縁端部外面に面を有する。体部内面に横方向の刷毛目を残している。



第10図　須恵器・土師器・土師質器・土錘（1／4）

2. 珠洲焼・土師質土器・土錘

珠洲焼（第11図）

今回の調査において出土した珠洲焼は、ほとんどが14～48区において出土したものであり、その分布状況をみると、とくに14～29区に集中している（第15図参照）。

器種は甕・壺・すり鉢の基本３セットが一応揃っているようであるが、体部が大部分を示めており、またすべてが小破片であるため、その器形全体を知りうるものはない。

１・２は甕口縁部の破片であるが、ともに小破片であり、口径などは不明である。１はやや長めの口縁が弓なりに外反し、内外面とも横ナデによる調整を行なっている。比較的浅めのタタキ目は、頸基部からやや下がって横位に打ちはじめる。肩部には径１㎝の円形竹管文がスタンプされている。２は短い口縁を頸部を押えて「く」の字に屈折させ、内外面ともに横ナデ調整を行なう。口縁端部はやや角ばる。頸基部と肩の間には稜を生じ、比較的シャープなタタキ目は、最初からやや右下がりに打ちはじめる。口縁頂部から外面にかけては、銀灰色のごま降灰釉をおびる。

３～11・13は甕あるいは壺体部と思われる破片である。３～５はタタキ目の幅が４～５㎜とわりあい広く浅い。いずれも堅く焼き締っており、薄くごま降灰釉をかぶっている。６は３～４㎜幅の右下がりの斜行条線が平行して施される。10は薄い器壁に６と同様な斜行条線が施されるが、幅１～２㎜と細かい端正なもので、打ち込みも鋭い。11は細かく浅いタタキ目が横位、斜位と不規則に重複して施され、淡灰色で焼成がやや甘い。

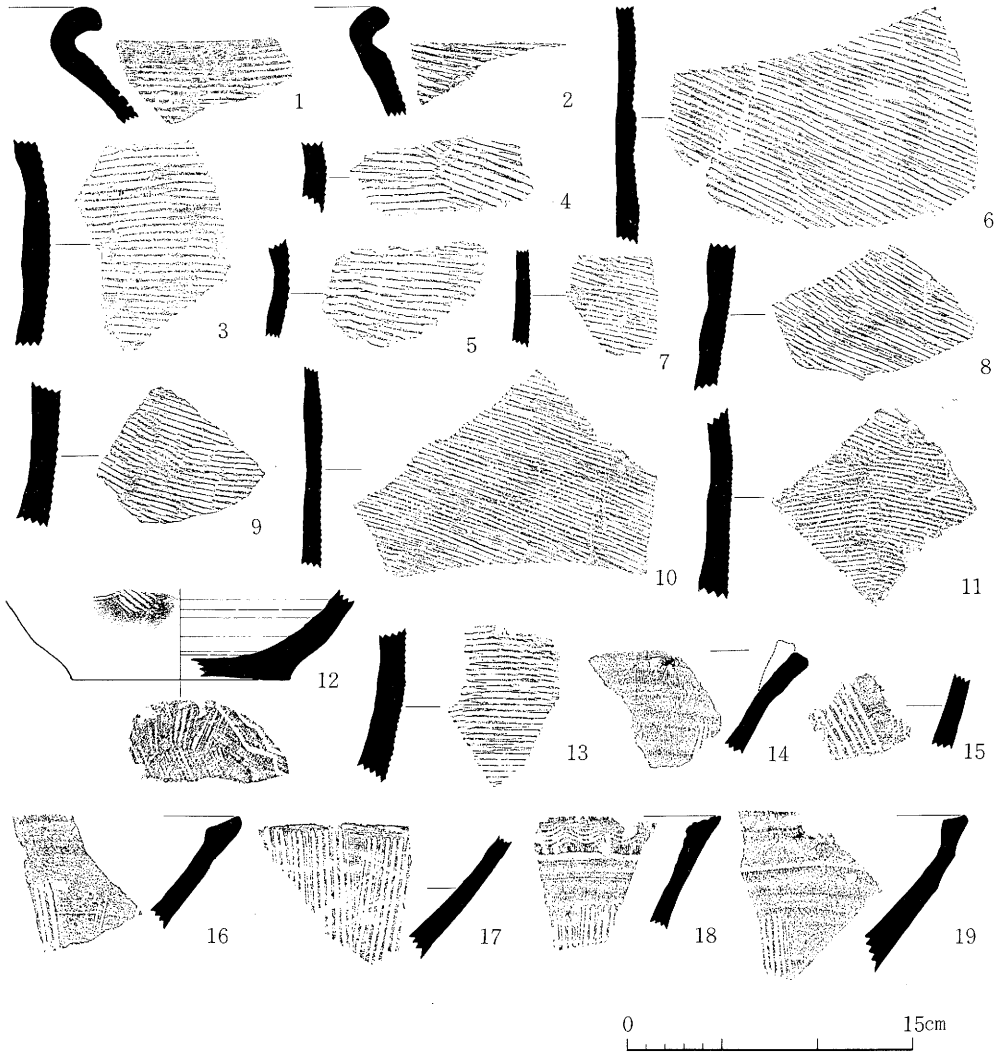
12は壺の底部と考えられる。底径11.5㎝を測る。底部はやや上げ底ぎみにつくられ、器体は底面よりややふくらみをもって立ち上がる。底面には静止糸切り痕を残し、さらに不規則な圧痕が重複する。器内面には轆轤による水引き痕を明瞭に残す。外面には幅２㎜程度のタタキ目がみえる。

14～19はすり鉢の破片であるが、すべて小破片のため口径、器高などは不明である。14は片口部分である。卸し目は間隔をおいて施されたようである。15は荒い卸し目を器面に残す。16は口縁端部がまるみをもって肥厚し、端面は内傾する。卸し目はわりあい狭い間隔で施されていたと思われる。色調は灰白色で、焼成は甘い。17は器内面一面に卸し目を施す。18はやや内傾した口縁端面に節描波状文を施し、口縁端面と器内面の区切りに一条の太い沈線をめぐらす。器体はほぼ直線的にひらき、卸し目は器面全体に施されたものと思われる。外面に不規則なナデつけが見られ、焼成不良。19は片口部に近い部分である。口縁基部を押えて端部を肥厚させ、端面には凹みをつくる。卸し目は深く、間隔をおいて

施される。内外面ともに釉が付着する。

土師質土器（第10図36・37）

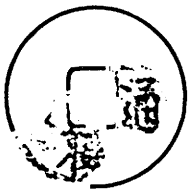
土師質の小皿が２点出土している。36は23区西の柱穴内から出土したものである。口径８cmをはかり、比較的厚手で、口縁部はややまるみをもった底部より屈折して立ち上がり外反する。口縁外面に横ナデを施し、底部との間に稜をつくる。内面にも横ナデによる調整を施す。内面全体および口縁外面には煤が付着している。37は34区西から出土したもので、口径10cmをはかる。口縁部はゆるやかにまるみをもって立ち上がり、端部をかるくつまみあげる。口縁部内面に一部煤が付着している。かなり磨滅しており、調整は不明。



第11図　珠　洲　焼（1／4）

土錘（第10図32・33）

14～48区から４点出土している。すべて土師質でかなり磨滅している。32は径2.9cm、長さ3.1cm、孔径１cm、重さ20ｇを計る。33は径3.4cm、長さ4.4cm、孔径1.4、重さ29ｇを計る。



第12図　銅　　銭

3．　銅銭（第12図）

銅銭が１点出土している。６区西の柱穴内から出土したものである。残存状態が悪く明確なことはいえないが、径2.4cmを測り、下の文字は「觀」と読めるようである。北宋の大観年間（1107～1110）に鋳造された「大觀通寶」の可能性が高い。

4．　木製品（第13図１～５）

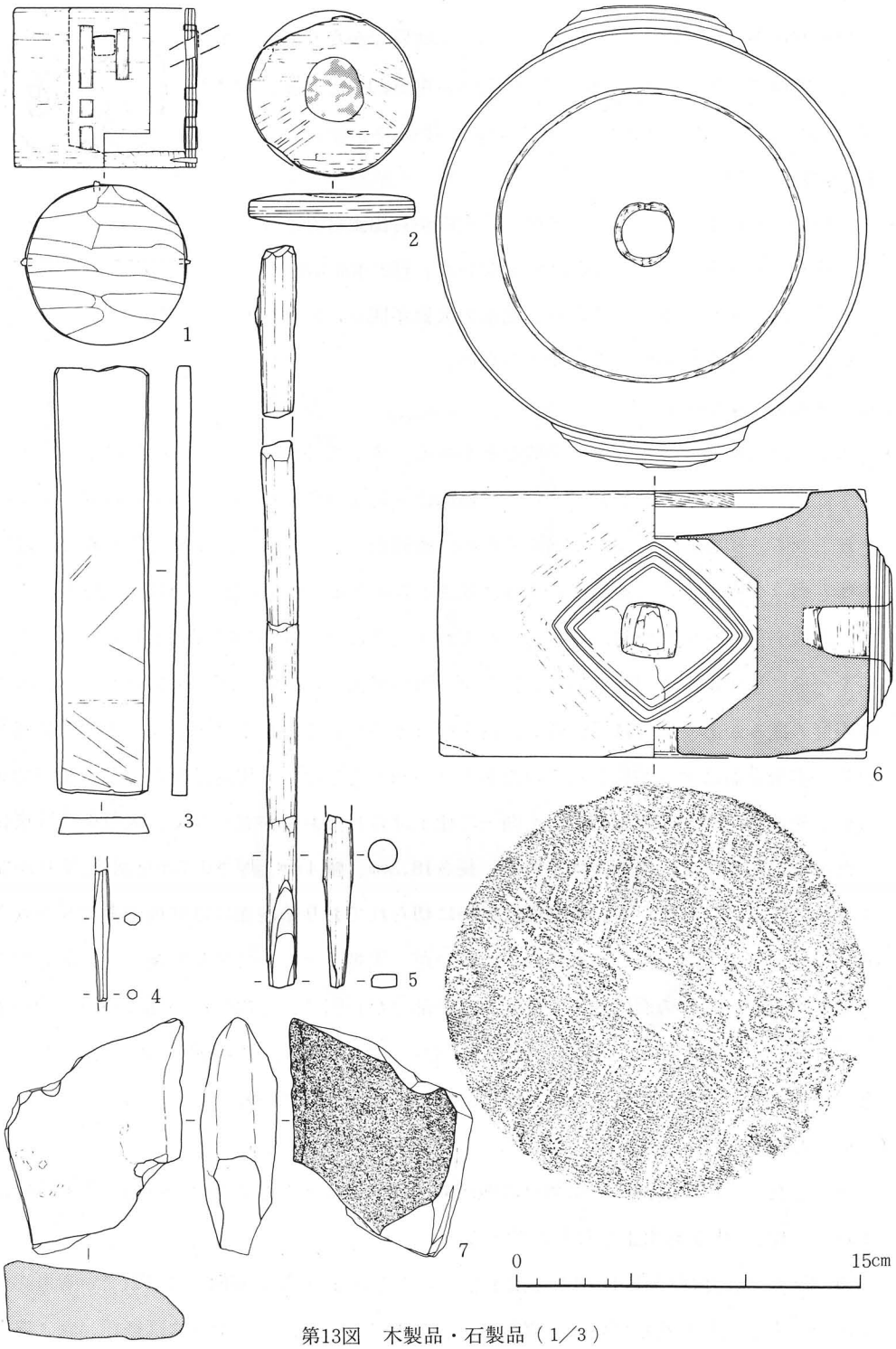
木製品には柄杓、桶子、箸、漆器などがある。すべて井戸（ＳＥ１）より出土した。

１は柄杓で、柄は失なわれているが、側面に一辺１cm程の方形の穴が切られているためそれと判る。桜皮がこの穴を補強するために両側面に通され、そのまま１枚の桜皮で曲物本体も綴り合せている。底板は径７cm、厚さ0.7cmで両面とも工具痕が明瞭に残されている。底板側面３ケ所に竹釘が打ち込まれており、これにより曲物下部にとめられる。２は漆を一部に残す木製の円盤である。径７cm、厚さ最大で1.4cm、片面中央に径2.5～2.8cmの略円形の窪みがありここに漆が残る。仕上げは朱漆であるが、下に黒漆及び下地が観察される。本来全面に塗りが施されていたかどうか判然としない。用途は今のところ不明であるが、先述した柄杓底板と径が全く同一に仕上げられており注意をひく。火熱をうけ炭化した部分がある。３は桶の側板である。長さ18.3cm、幅４cm、厚さ0.7cmを測る。反りがなく平たく仕上げられている。両側面は斜めに切られており、内面には底板のあたりが残る。４は箸である。ごく一部しか残されていないが、先細りとなっており先端に近い部分であることが判る。削りの面は８面を数え、太い部分が長円に、先端に近い部分が円に近い形となっている。５は径1.3cmを測る自然木に近い遺物で、先端のみ両面から削り出されている。用途不明。この他、板材、炭化木材、縄なども出土している。

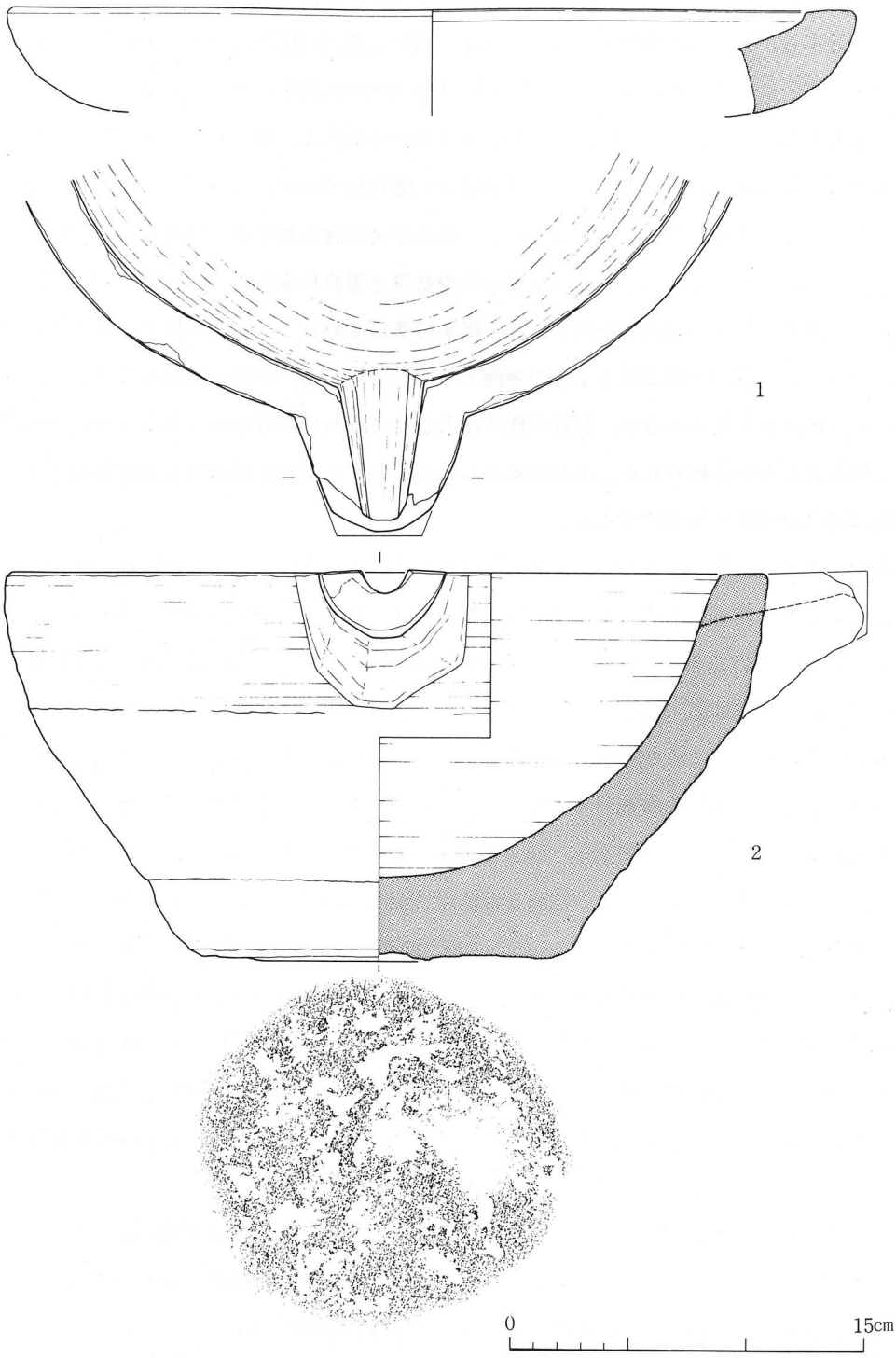
5．　石製品（13図６・７、第14図）

出土した石製品には臼、片口鉢その他があり、そのほとんどは井戸（ＳＥ１）内あるいは土坑（ＳＫ２）内から出土したものである。

第13図６は、井戸（ＳＥ１）内から出土したものである。一般に茶臼と呼ばれているものの上臼で、完全な形を残している。直径19cm、高さ11.7cmを計る。上面には径13.4cm、深さ



第13図　木製品・石製品（1／3）



第14図　石製品（1／3）

2cmのくぼみをつくり、中央には孔径2cmの芯棒受けをかねた円形の茶の供給口がまっすぐに貫通する。挽き木は横打込み式で、側面に相対して、一辺が2.4cmの角丸方形の挽き木孔が二カ所にあり、孔の周辺には縦7.9cm、横8.8cmの三段からなる「子持ち菱」といわれる装飾を施している。二カ所の挽き木孔のうち一カ所には、挽き木の一部が残っている。かなりよく使い込まれたものらしく、底両はよく磨耗しており、目のパターンは不明であり、かわって不規則な浅い条線がみられる。底面中央付近はわずかに凹面をなしており、「ふくみ」の痕跡をとどめている。石質はやや軟質と思われる砂岩で、色調は青味をおびている。側面下部から底面にかけて、黒く煤が付着しており、二次的な加熱を受けていることがうかがえる。一般に挽き木孔の装飾として「子持ち菱」が用いられるのは、宇治茶臼にその例がよく見られるが、石質や作りがあまりていねいではないことなどから地元周辺で作られたものと思われる。また形態から一応茶臼としたが、用途としては茶臼本来の目的以外に流用された可能性もある。

第14図1は、土坑（ＳＫ2）内から出土したものである。茶臼の下臼の受け皿部分、あるいは盤と考えられる破片である。口縁部の約4分の1を残し、推定口径は36cmを計る。口縁部が丸く内湾して立ち上がり、口縁部上面は水平につくる。外面には細かな工具跡を鮮明に残すが、内面はていねいに研摩されている。口縁部上面から外面にかけては、黒く煤が付着しており、二次的な加熱を受けている。この石製品を茶臼下臼の受け皿部分と考えた場合、前述した上臼とのセット関係は、石質の違いなどもあり、その可能性は少ないと考えられる。

第14図2は、片口の鉢である。井戸（ＳＥ1）内から出土したものである。口径32cm、器高16.5cm、底径16cmを計り、完全な器形を残している。器体はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部上面および片口部上面は水平につくる。器壁は約3cmと一定の厚みを保ち、底部は厚さ4cmを計り、安定感がある。外面の仕上げは荒々しい工具痕をそのまま残しているが、内面および口縁部上面、片口部分上面はていねいに研摩されている。内面全体に煤が付着しており、二次的な加熱を受けている。用途としては、搗き臼あるいは捏ね鉢を考える。

第13図7は、25区西から出土したもので、遺構には伴わない。用途不明の破片である。下面はほぼ扁平であるが、上面は端部から中心部に向って厚みを増す。厚さは最大で3.2cmを計る。色調は淡黄褐色で、石質は軟質で緻密である。下面には厚く煤が付着し、上面にも煤の付着がみられる。

第Ⅴ章　ま　と　め

今回の調査位置は遺跡の中心に近い部分とはいえ、調査区が幅約４ｍ、長さ約110ｍと狭長であり、遺跡の性格を知るに充分な資料を獲得することができたとはいい難い。しかし、少量ではあるが出土した遺物は遺跡の中心時代とその存続の幅をある程度示しているし、わずかながら発見された遺構についても、現在実施されている国道８号小矢部バイパス建設工事に先立って実施されている発掘調査の進展によっては、その位置付けが可能である。

ここでは、今回出土した各時代の遺物をめぐる諸問題と、今回の調査区での遺物分布の傾向と遺構との係りをとりあげ、まとめとしたい。

1．出土須恵器と生産地

出土した須恵器で最古のものは第10図１・２の杯蓋及び杯で、６世紀後半の年代が与えられる。当該期の須恵器窯については、射水丘陵を中心に近年発掘調査[10]が進展しているが当市及びその周辺地減では、現在までのところ発見されていない。

当市域で発見されている窯跡で最古のものは、７世紀後半代と目される西蓮沼窯[11]及びこれよりやや後出のものとみられる蓮沼新堤窯[12]、山王奥堤窯である。瓦陶兼業窯でもある後二者は杯蓋の内面かえり消失前後の遺物を焼成しており、今回出土した第10図４・５はこの地域から供給された可能性が高い。生産地は８世紀前半代に至り急増し、松永・長窯跡群[13]、谷内（やち）窯跡群[14]、平桜岡山（ひらざくら）窯跡群[15]、安居（やっすい）・岩木窯跡群[16]で生産が開始され、この時期、当地においても須恵器生産が安定操業に入ったことを示している。このうち福野町・福光町にまたがる安居・岩木窯跡群が中核的窯跡群として以後成長をつづけ、９世紀代に至るまで比較的長期にわたり生産が継続されたとみられる。利波郡内での須恵器生産地はこのように、時間の経過とともに全体として南下する傾向がみられるが、８世紀後半代には東進する動きもみられ庄川右岸にも生産地がもうけられる。ここでは砺波市福山窯、増山窯[17]など数基の窯跡が知られている。出土遺物の多くはこれら一連の窯跡群から供給されたものと考えられる。

2．中世以降の遺物

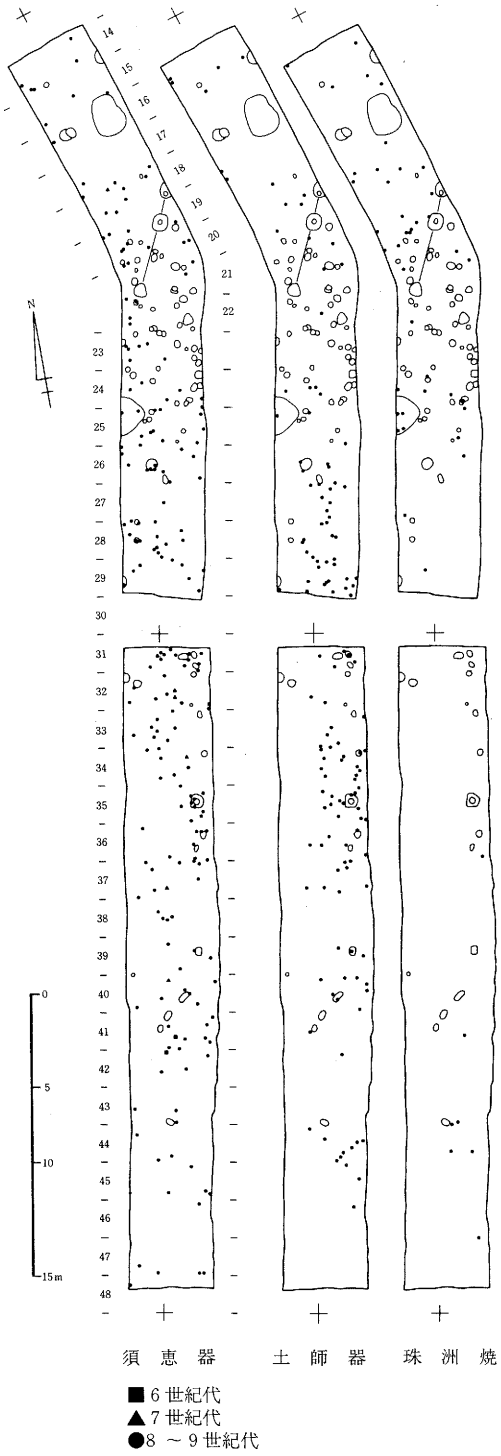
今回出土した珠洲焼の大半は小破片で占められ、その年代を位置づける手がかりとなるものは少ないのであるが、吉岡康暢氏による珠洲編年[18]に従えば、ほぼⅣ期（14世紀）からⅤ期（15世紀前半）に属するものであろう。甕口縁部を残す（１）については、古い要素を

もつものと思われる。

土師質小皿については、共伴する珠洲焼によってその年代が位置づけられているのであるが、宮田進一氏の土師質土器分類[19]によれば、15世紀から16世紀に位置づけられる。市内日の宮遺跡[20]においても、その出土が報告されている。

井戸内出土の木製品については、穴水町西川島遺跡群の井戸内出土木製品に、有蓋の柄をぬかれた柄杓、著状木製品などがあり、井戸の「まなこ」として、中世民間信仰の形態を知る例がみられる[21]。今回出土の柄杓にも、柄がみあたらず、円盤状の漆器と柄杓の径が一致することから蓋としての機能を想定した場合、興味深いものがある。

茶臼、石鉢については、近年中世の城館跡などから出土する例がふえている。県内では上市町弓庄城跡[22]、市内日の宮遺跡[23]などにその出土例がみられ、青森県尻八館跡[24]、福井県一乗谷朝倉氏遺跡[25]からは、今回出土したものと同様の三段からなる「子持菱」の装飾を持つ茶臼が出土している。また、市内茶店[26]においては、先代が使用していたという同様の茶臼が保存されている。茶臼は中世より現代に至り臼の機能が機械にとって変わるまで、長く同形態のものが使用されており、その時期の決定は困難である。なお茶臼に限らず臼類の廃棄処分については、臼が食物に関連したものであるところから神聖視され、不要になった臼は「魂ぬき」として故意に割ってから処



第15図　14～49区の遺物分布（1/400）

分されていたようで、今回のように完全な形での出土例は少ない。

3. 遺物の分布と遺構の所属時期

14～48区で出土した須恵器、土師器、珠洲焼について分布図を作製した。（第15図）

須恵器、土師器については、調査区全域にわたってその分布がみられ、桜町遺跡の特徴の一端をよく示している。

珠洲焼については、前述のように14～29区に集中する傾向がみられ、14～48区で検出された柱穴第２群の分布状況（18～25区に集中）とほぼ一致する。本調査区出土の珠洲焼については、珠洲編年のⅣ～Ⅴ期にあたり、柱穴内から出土した土師質小皿についても、15～16世紀の年代が考えられる。したがって、第２群の柱穴については、14～16世紀を想定できる。

第１群の柱穴については、第２群との切り合い関係も認められず、柱穴内からの出土遺物も時期を決定できるまでには至らない。第１群と第２群の間には若干の時期差を想定することは可能であるが、今回の調査結果からは断定することはできない。

１～８区の遺構については、その出土遺物には中世からの出土例がみられ、また確実に近世以降に所属するとみられる遺物も出土していないことから、ほぼ中世に属するものと考えられる。本調査区東に隣接して、現在桜町字舟岡に所在する神明社旧社地とされる所がある。神明社については、その創建年代は不詳であるが、平安時代末頃にさかのぼるという伝えもあり[27]、１～８区の遺構および遺物については、神明社に関連するものの可能性も考えられる。

以上、桜町遺跡産田地区における調査の成果を述べてきたが、これらは中世室町時代から安土桃山時代に所属するものと考えられる。中世に属する遺跡は市内各所にみられ、桜町周辺においても、中世荘園として田河保、宮嶋保の存在[28]が知られ、今後それらに関係した遺跡が発見される可能性もある。

桜町遺跡は、本調査および57年度調査、また国道８号線小矢部バイパス建設に伴う調査[29]によって、さらにその実態が明らかにされ、古墳時代、奈良時代、中世を中心とした当時の人々の生活を知る上で、重要な資料を提供してくれることとなった。

註・参考文献

1　小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報（1979年度～1983年度）』1980～1984小矢部市教育委員会
2　木倉豊信「越中の古代・中世と交通」『越中史壇』10号1957越中史壇会
3　木倉豊信「越中における荘園の分布」『越中史壇』29　1964越中史壇会
竹内理三編『荘園分布図』1975吉川弘文館
4　小矢部市史編集委員会『小矢部市史』上巻1971小矢部市
5　安念幹倫・山森伸正『富山県小矢部市桜町遺跡－坂東地区発掘調査概報－』1984小矢部市教育委員会
6　伊藤隆三・安念幹倫『富山県小矢部市桜町遺跡（古苗代・鷲場地区）』1982小矢部市 教育委員会
7　上野　章他『富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書』1978富山県教育委員会
8　山本正敏他『富山県小矢部市竹倉島遺跡発掘調査概報』1978富山県教育委員会
9　小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報（1979年度）』1980小矢部市教育委員会
10　上野　章他『富山県小杉町・大門町　小杉流通業務団地内遺跡群第３・４次緊急発掘調査概報』1982富山県教育委員会
11　1961年富山考古学会により試掘調査が実施されている。
12　伊藤隆三「蓮沼新堤窯跡」『北陸の古代寺院とその源流を探る』研究会資料1983富山市民俗民芸村考古資料館・富山考古学会
13　西井龍儀・伊藤隆三『富山大学考古学談話会第19回発表資料』1981
小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ（1981年度）』1982小矢部市教育委員会
14　小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ（1982年度）』1983小矢部市教育委員会
15　伊藤隆三「富山県小矢部市平桜岡山３号窯跡」1981小矢部市教育委員会
16　岡崎卯一「安居寺斉藤家所蔵の須恵器」『大境第４号』1963富山考古学会
福野町史編纂委員会『福野町史』1964福野町
福光町史編纂委員会『福光町史』1971福光町
湊晨他『富山県史・考古編』1972富山県
17　砺波市史編纂委員会『砺波市福山（徳万赤坂）須恵器窯発掘報告』1962
砺波市史編纂委員会『砺波市史』1965砺波市
18　吉岡康暢「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』18 1982庄内考古学会
吉岡康暢「珠洲焼の生産と流通」『考古学研究』第27巻第４号（通巻108号）1981考古学研究会
19　宮田進一他『富山県上市町弓庄城跡第４次緊急発掘調査概報』1984上市町教育委員会
20　註７に同じ。
21　四柳嘉章他『西川島Ⅰ』1980穴水町教育委員会
22　註19に同じ。
23　註７に同じ。
24　大橋康二他『尻八館調査報告書』1981尻八館調査委員会
25　三輪茂雄「臼」『ものと人間の文化史』25　1981法政大学出版局
26　先代が抹茶を挽くのに用いたという茶臼が保存されている。いつ頃のものかは不明。
27　註４に同じ。
28　註４に同じ。
29　註５に同じ。

図　　版

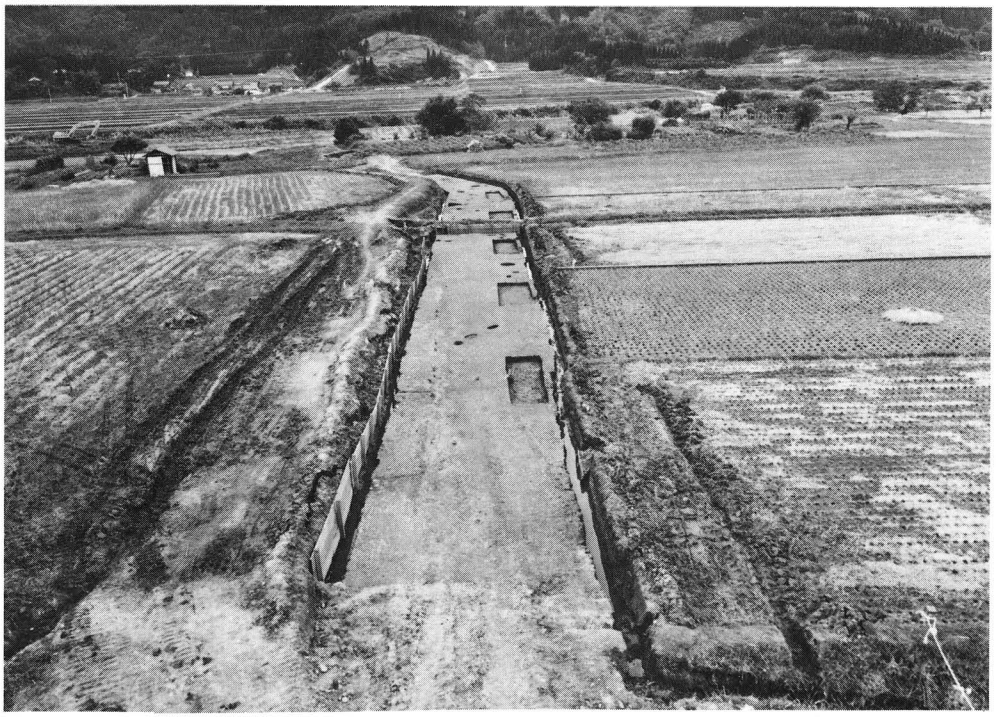
図版1　空中写真

図版2　調査区(1)

調　査　前（北より）

調　査　前（南より）

試掘調査完了後（北より）



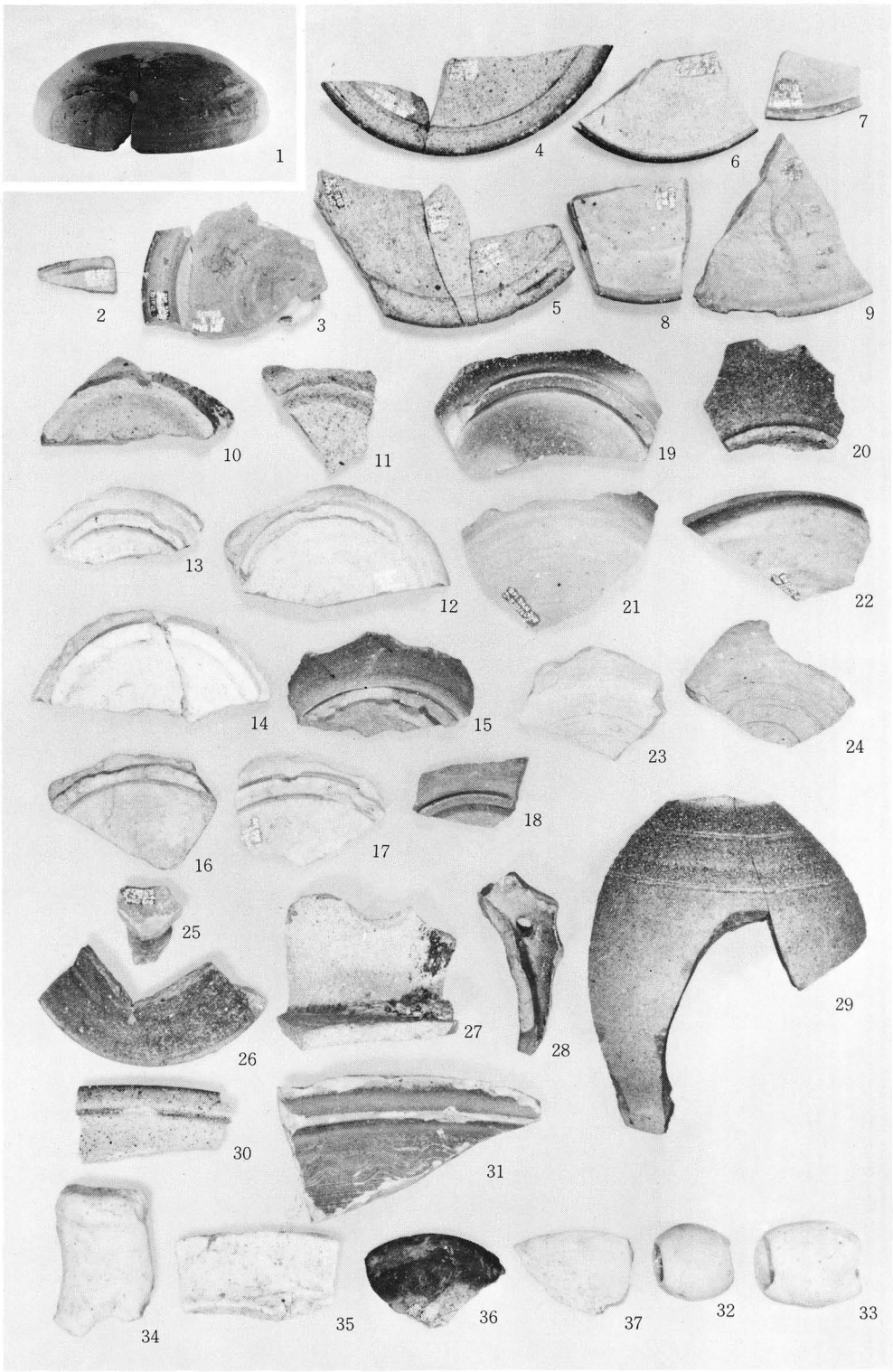
試掘調査完了後（南より）

1～8区の遺構（北より）

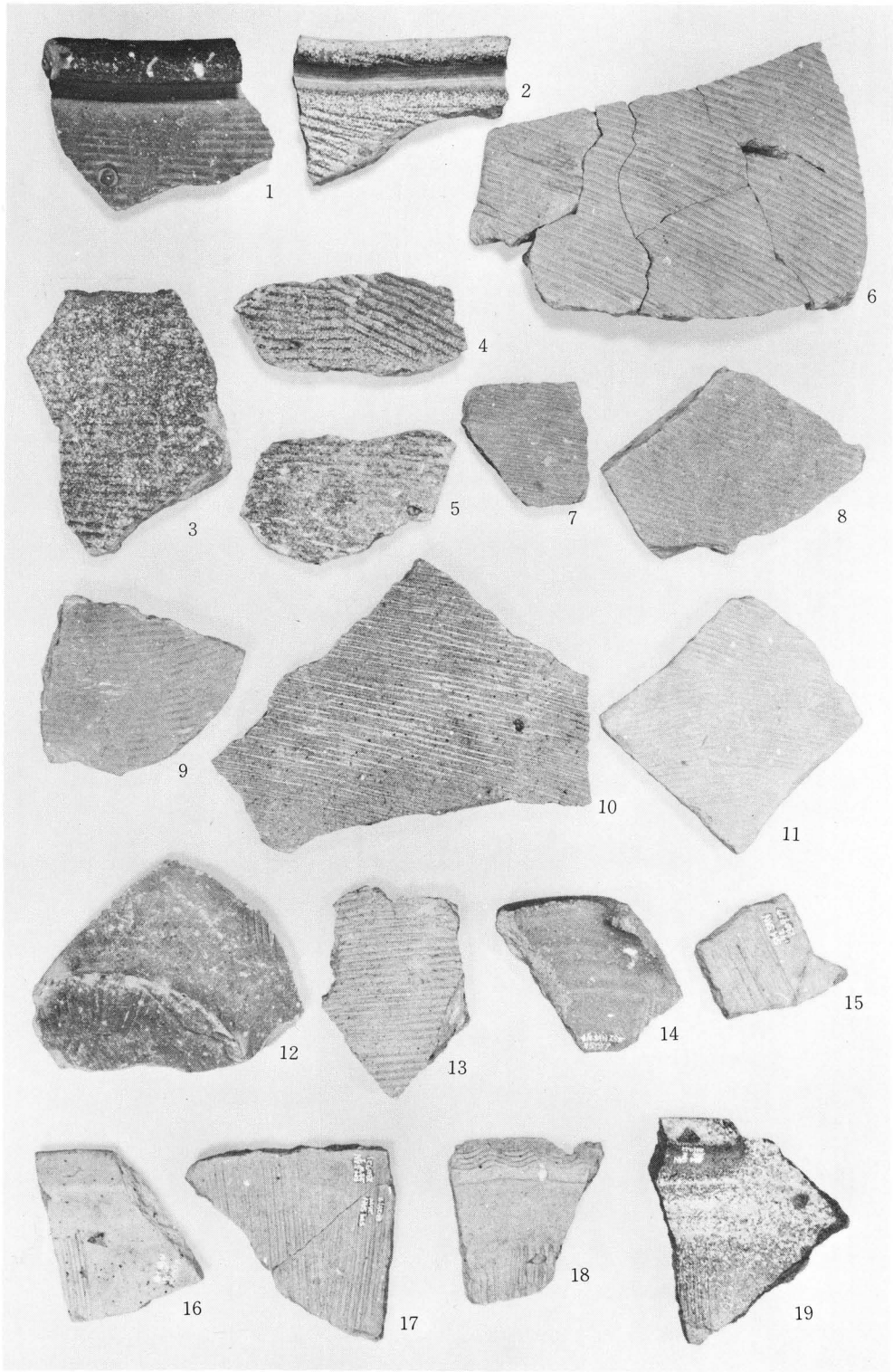
14～48区の遺構（北より）

井戸（ＳＥ１）及び石製片口鉢出土状態

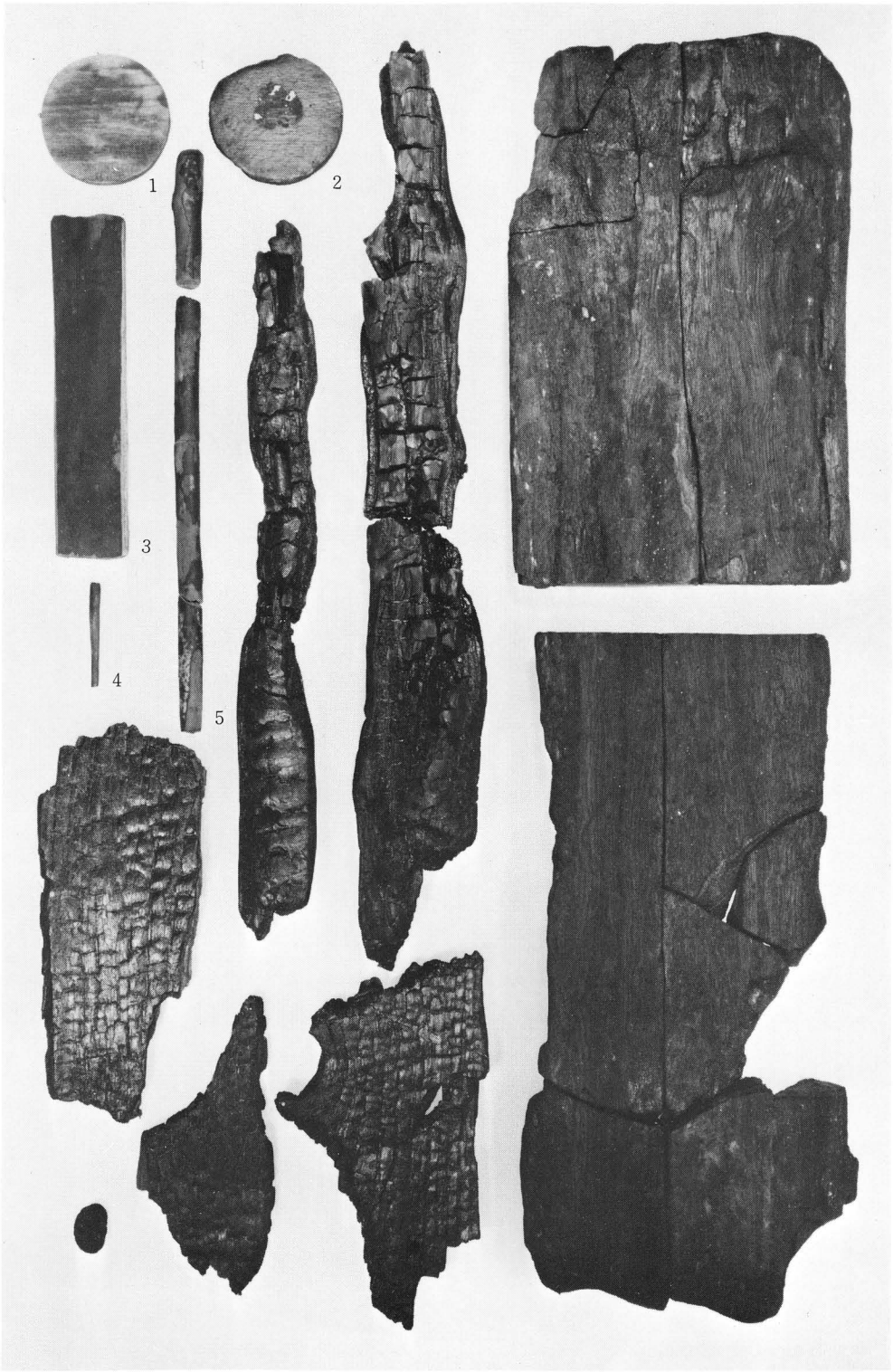
井戸付属施設（ＳＫ２）



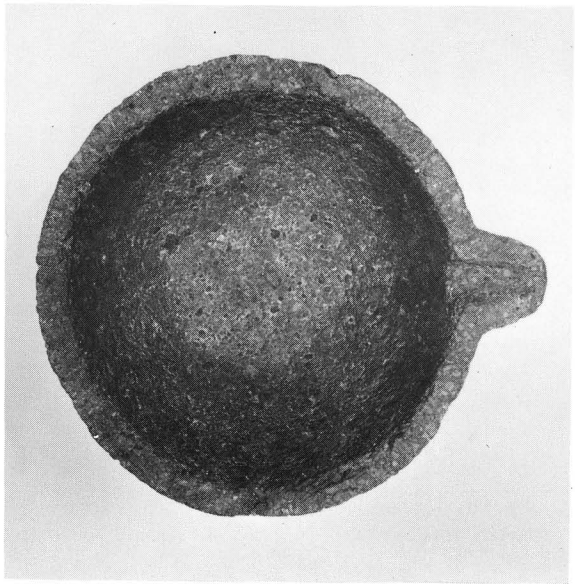
須恵器・土師器・土師質土器・土錘

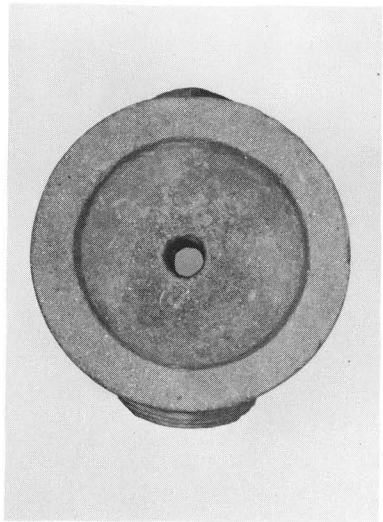


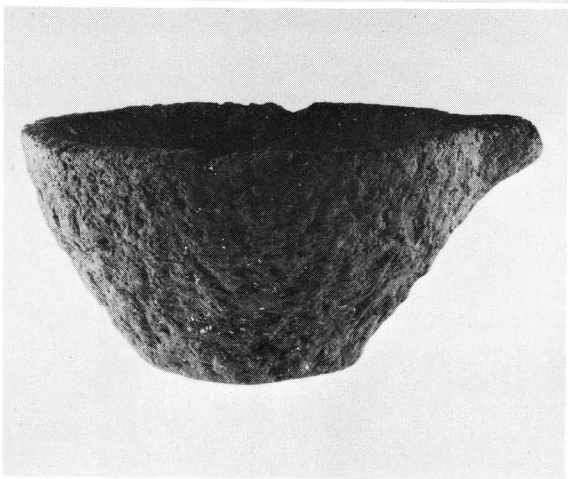
珠　洲　焼

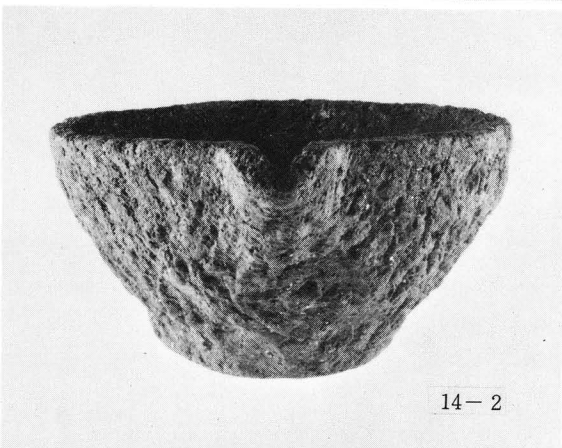


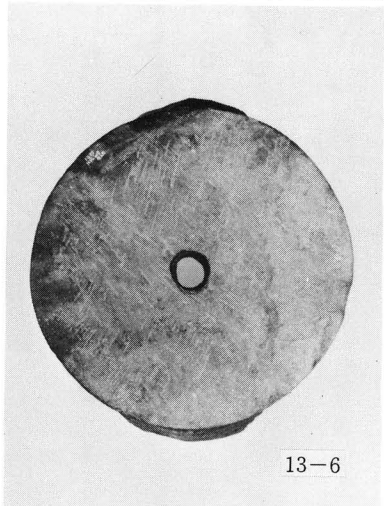
木製品・縄他











石製片口鉢・石　臼

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第15冊

富山県小矢部市　桜　町　遺　跡
—城山都市下水路新設工事に
伴う産田地区の調査—

発　行　日　1984年3月31日
編集・発行　小矢部市教育委員会
（富山県小矢部市本町1番1号）
印　　刷　ヤマシナ印刷